

# 行動分析学に基づく社会福祉学科国家試験への取り組み

## ー2021年度試験結果の解析ー

萩原 昭広,<sup>\*†</sup> 大野 まどか,<sup>\*</sup> 鶴野 隆浩,<sup>\*</sup> 中川 千恵美,<sup>\*</sup> 石川 久仁子,<sup>\*</sup>  
富澤 宏輔,<sup>\*</sup> 山中 徹二,<sup>\*</sup> 菅原 大輔<sup>\*\*</sup>

**目的：**社会福祉士国家試験の全国合格率は第8回以降30%前後、精神保健福祉士国家試験の全国合格率は第3回以降60%前後で推移しており、年度によって合格点は上下している。昨今のコロナウイルス感染拡大により大学への登校が制限される時期もあった。そのため、これまでのような直接的な指導による国家試験対策だけでは、合格に達する力を身につけさせることが困難な状況となった。

**方法：**2021年度に国家試験対策についての指導方針を見直し、教員主導ではなく学生の自発性を高め、「自ら取り組み主体的に学びを進める」という目標をもとに、自主学習グループの組織化や目標シートの活用など、行動分析学的アプローチを用いたさまざまな仕掛けを講じ、年間を通して学生へのサポートを学科全体で行った。

**結果：**学科として講じた国家試験対策に対する仕掛けは多くの学生の学習意欲を高め、それが勉強に対する自発性の向上、学生同士の協同学習による学びの深化、自分なりの取り組み方の発見などにつながった。2021年の国家試験合格率は第34回社会福祉士国家試験合格率64.9%、第24回精神保健福祉士国家試験合格率83.3%と大きな伸びを示し、全国の新卒合格率を社会福祉士・精神保健福祉士ともに上回る結果となった。

**結論：**今回の取り組みにより、より効果的な社会福祉士国家試験対策をとりえると推察される。

**キーワード：**国家試験対策, 行動分析学, 自発性, 仕掛け

(2022年10月13日受付け、2022年12月8日受理)

### はじめに

#### 1 社会福祉学科のポリシーを踏まえた国家資格取得のミッション (必要性)

大阪人間科学大学人間科学部は、社会福祉、保育・教育、医療技術を中心に生活の質的向上の方途を探る人間科学を学ぶことによって、科学的理論に基づく対人援助の専門知識・技術と実践的な課題解決能力を併せ持つ人間味豊かな人材を育成していくことを目指すと共に、社会福祉、保育・教育、医療技術領域の発展に貢献していくことを教育研究上の目的としている。社会福祉学科は、地域社会における人々の複雑な生活課題を解決・軽減し、人々の尊厳と人権を支える多様な支援方法を身につけた福祉の専門職の育成を目指し、教育研究を行っている。

本学は各学科において、それぞれ3つのポリシーを掲げている。本学科では、3つのポリシーのうち、ディプロマ・ポリシーの2、「対人援助において、社会福祉が実現すべき価値・理念が提起できるよう、「ソーシャルワーカー・ケアワーカー（社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士・スクールソーシャルワーカー）として求められる能力」を身につける」、アドミッション・ポリシーの4、「将来、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、スクールソーシャルワーカー資格の取得を希望し、福祉の専門職として活躍する意欲を有する人」という項目で国家資格に触れている。本学科においては、将来、福祉の専門職として活躍したいという意思を持って入学した学生を4年間の学びを経てソーシャルワーカー・ケアワーカーとして求められる能力を身につけさせることを重視している。それを具現化

\* 大阪人間科学大学 人間科学大学部 社会福祉学科

\*\* 大阪人間科学大学 キャリアセンター課

\*† 責任著者：大阪府摂津市正雀1-4-1、大阪人間科学大学 人間科学部 社会福祉学科

E-mail: a-hagihara@kun.ohs.ac.jp

させるために、学科教員は学生に目指す国家資格の取得が実現できるような指導を日々行っている。国家資格取得・国家試験合格者の向上という出口戦略を重視することはもちろんであるが、「この大学を選ぶ決め手になったのが国家試験の合格率の差の高さです。(中略)勉強しなければならぬことがたくさんあって、決して楽ではないけれど、やりがいがあり、毎日が充実しています」<sup>1)</sup> という大学生の意見もあるように、高校生の進路選択において国家試験の合格率は大きな要因の一つとなることから、入口戦略という観点からも国家試験対策を考える必要がある。

## 2 2018～2020年度の受験状況

2018～2020年度の本学科学士の受験状況を示したものが以下の表1・2である(新卒のみ)。表からは、2018～2020年度の世界福祉士国家試験の合格率は30%強で推移し、新卒合格率は60%弱となっているが、本学学生は合格率・合格人数ともに減少し、2020年度はついに全国平均を下回った。2018～2020年度の世界保健福祉士国家試験の合格率は50～55%。新卒合格率は70%強となっている。本学の受験人数は世界福祉士と比べて少ないものの、全国合格率と同等もしくは上回っており、2019年度は新卒合格率も上回った。

表1 2018～2020年度の受験・合格状況(世界福祉士)

	世界福祉士				
	受験者数 (人)	合格者数 (人)	合格率 (%)	全国合格率 (%)	新卒合格率 (%)
2020年度 (33回)	28	8	28.6	33.6	56.3
2019年度 (32回)	34	12	35.5	33.0	57.5
2018年度 (31回)	29	14	48.3	32.9	58.3

表2 2018～2020年度の受験・合格状況(世界保健福祉士)

	世界保健福祉士				
	受験者数 (人)	合格者数 (人)	合格率 (%)	全国合格率 (%)	新卒合格率 (%)
2020年度 (23回)	13	7	53.8	55.5	71.4
2019年度 (22回)	6	5	83.3	50.4	71.9
2018年度 (21回)	8	5	62.5	50.9	71.3

## 3 直近3年間の模試(業者模試・学内模試)の受験状況

表3は、2018～2020年度の東京アカデミー世界福祉士全国公開模試(以下、東アカ模試)、日本ソーシャルワーク教育学校連盟 世界福祉士全国統一模擬試験(以下、ソ教連模試)、日本ソーシャルワーク教育学校連盟 世界保健福祉士全国統一模擬試験(以下、ソ教

連(精神)模試)を一覧にしたものである。ソ教連(精神)模試は、ここ3年間、5割の得点率を維持している。世界福祉士の模試に関しては、模試ごとに難易度の差が生じるため一概に言えないが、それよりも実際の国試の受験者数と模試の受験者数に開きがある年度があることに注目すべきである。特に2019年度のソ教連模試は、国家試験受験者数の半数しか受験しておらず、学生個々の模試に対する取り組み意識がどのようなものであったのか考える必要がある。

表3 2018～2020年度の模試成績一覧

	東アカ模試			ソ教連模試			ソ教連(精神)模試		
	人数	平均	中央値	人数	平均	中央値	人数	平均	中央値
2020年度	20	79.4	78.5	22	59.3	59.5	8	38.8	38.0
2019年度	29	64.5	66.0	17	77.3	75.0	5	39.2	40.0
2018年度	21	73.7	73.0	21	62.7	63.0	8	39.0	39.0

## 4 2021年度国家試験対策の取り組み

2018～2020年度の受験状況や模試成績一覧、最終学年での取り組みの様子などから、本学科の受験学生の状況は以下のような傾向であったと考えられる。

- ・学内模試の受験状況・報告者数が思わしくないことから、自分の取り組みに自信が持てず、途中でモチベーションの低下が生まれていた
- ・受験自体を途中で断念する学生が一定数存在することから、どの程度本気で国試勉強に取り組んでいたのかが曖昧である
- ・教員側で問題などを準備して学生に提示するも、自発的に取り組む学生の割合が伸びていない
- ・意識の高い学生は小グループを形成して学習を進めているものの、学生自体が個々で国試勉強をする形が大半であり、どの程度取り組んだのかが可視化できない

以上から推察すると、「国試勉強に対するモチベーションの維持」「自発的な勉強方法の体得」「自分の取り組み状況の可視化」という課題が浮かび上がってくる。挙がった課題をどのように捉え、いかに改善につなげていくことができるかが本学科における国試対策にとって重要なポイントとなる。

ライフネット生命創業者で、現在は立命館アジア太平洋大学学長である出口は、何事かを成すには4つのPが必要であると述べている。それは①目的(purpose)、②情熱あるいはやる気(passion)、③仲間(peer)、④遊び心(play)であり、中でも決定的に重要なのは遊び心であると述べている<sup>2)</sup>。出口の言葉を借りるならば、「合格したい」という目的を学生に持たせ(①)、学生のやる気を引き出したサポートを学科全体で行い(②)、同じ目的を持った学生同士が仲間意識を持って取り組めるようにする(③)システムを構築できれば、国家試験対策として有効な手立てになるのではないかと

という仮説が成り立つ。もちろん、このシステムを機能させるには、教員主導の上意下達方式では目指す意図が異なるため、このシステムに遊び心を持たせることが肝要である（④）。学生指導を行うためのシステムを構築し、そのシステムを継続して運用していくためには、どのような効果をもたらすものであるのかについての一定の根拠が必要となる。この根拠については、行動分析学という心理学の一分野から検証していきたい。

以上のことを踏まえ、本研究では年間を通して行った行動分析的アプローチに基づいた学生への働きかけや仕掛けが、学生の自発的な国家試験勉強への取り組みにどのような変容や効果をもたらしたのかについて、実際の取り組み内容と今年度の国家試験の結果をもとに検証することを目的とする。

## 5 倫理的配慮

本研究はグループLINEでのやり取りや学生が記入したシート、取り組みの様子が分かる写真やアンケートによって得られた学生の声などに触れているため、対象者に対し研究に関する主旨説明を行った上で、上記資料に関する使用許諾を取り同意を得ると共に、大阪人間科学大学倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号2022-25）。

## 方 法

### 1 行動分析学とは

行動分析学は、「人間を含めた動物全般を対象として、行動の原理が実際にどう働くかを研究する学問」という心理学の一分野である<sup>2)</sup>。その中の手法の一つであるABC分析は、問題解決に役立つ行動に対して、なぜ行動が少ないのか・多いのか、どうすれば行動を増やしたり、減らしたりできるのかを分析する手法である。ある行動の問題解決を考える際に、Aの先行条件（Antecedent）は「行動が起こる直前の活動や状況」、Bの行動（Behavior）は「行った行動」、Cの結果（Consequence）は「その行動による結果（その行動を起こした人の言動や、周りの環境の変化）」を考えてあてはめるというものである。

例えば、国家資格取得を目指し勉強を始めたものの、結果に結びつかないというケースをABC分析に当てはめてみると、図1のようになる。

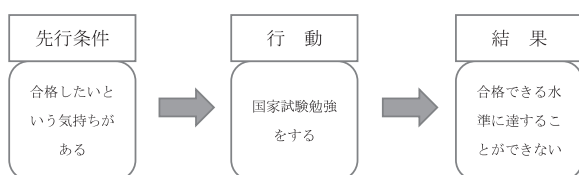


図1 ABC分析（結果に結びつかないケース）

表4から、国家試験受験を希望する学生が合格するためには、B→C（行動→結果）のプロセスに着目し、合格に向かう行動をいかに結果に結びつけられるかが大切になる。つまり、「学生個々が合格できるような力をつけられるようにすること」「行動が結果に結びつくような学びの方法を提示すること」「望む結果を得ることができるように自発性が高まるような行動を促すこと」ができるかがポイントになる。

表4 ABC分析を行った後の問題がある場合分け

原 因	対応策
①先行条件に、問題がある場合	先行条件を変えるべき。もし、先行条件を避けることができない場合は、先行条件を細かくする。
②行動に問題がある場合 1．その行動に対しトラウマがある場合	まずは、達成目標と行動目標を決める、ABC分析を行い、実践する際には「好子」を60秒以内に出現させる」「誰かと共に行う」ようにする。
②行動に問題がある場合 2．結果に好子が生じるか、嫌子が消失することで、無意識のうちに行動を起こしている場合	その人にとって好子が生じるか、または嫌子が消失しているため、それをなくすようにする。

Webサイト 公立はこだて未来大学のプロジェクト学習「こころの科学について学ぼうー心と脳の科学の教材作成ー」をもとに萩原が作成

次節では学生の年間を通した国家試験勉強を主体的に行う上で重要となるポイントについて、行動分析学の見地から考えてみたい。

### 2 行動分析学×国家試験

前述のように、行動分析学とは心理学の一分野であるが、この考え方を基にした行動科学マネジメントという概念を提唱している石田は、「部下が最大限の能力を発揮するための環境づくりと関係性を構築するためのもの。つまり、部下に自ら行動してもらうことで、なおかつそれが繰り返しできるようにする」、「さらに『楽しんで』行動することができるようにする」と述べており<sup>3)</sup>、根本的には「仕事は面白い」「楽しい」と思わせ、それを習慣化させることが重要であるとしている。本研究ではビジネスの分野で一定の成果を上げている行動分析的アプローチを、国家試験勉強に取り組む学生に対していかに援用できるかということを出発点としている。

国家試験勉強は、これまでの大学での単位取得を目指す学びとは異なり、出題される問題でどのようなことが問われていることを正確につかみ、適切な解を5つの選択肢から選ぶということが求められる。つまり、一斉授業による学びだけでは力がつきにくく、問題自体の読解力や思考力が求められるとともに、個々の取り組み意識、主体的な学びの姿勢が重要なファクターとなる。B.F.スキナーの業績やその哲学について研究したオドノヒューとファーガソンによると、「教育の目



標は行動レパートリーの拡大であり、行動を抑制することではないこと。強化をもっと重視すべきで、また人為的な強化子に頼るべきではないこと。生徒たちはほとんどの場合、新しい行動の学習（知識の獲得）そのものにごく自然に強化されること」を挙げている<sup>4)</sup>。またスキナーは、強化は建設的な機能を持つ唯一のものであるので、特に重視していること、行動コントロールには、罰ではなく強化のほうがずっと優れた手段だと考えている<sup>5)</sup>。このことから、国家試験対策を行う上では、伝統的な教育方法である一斉授業のみで進めるのではなく、学生に新しい行動を学習させ、それを強化させていくという手法が行動分析的には的を射ているという仮説が成り立つ。では、実際に学生の新しい行動を学習させるにはどのような働きかけを学科として考えていけばよいのだろうか。先ほどのABC分析の図をもとに考えてみる。

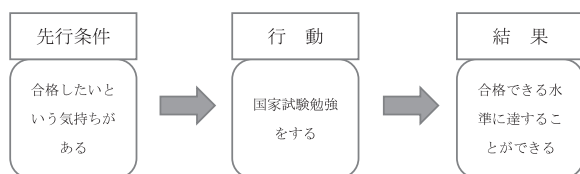


図2 ABC分析（結果に結びつくケース）

最終的な目標を「合格できる水準に達する」とした場合の「結果」には、どのようなことが結果として現れれば、最終目標に到達したといえるのであろうか。想定されることを以下に記す。

- ・勉強したことが知識として身につく
- ・問題を解いていくことで分かる問題が増える
- ・問題を解くことが苦ではなくなる
- ・勉強した分だけ、模擬試験の結果に現れる
- ・先生に質問することで理解が進む
- ・自分なりの勉強習慣が身につく
- ・同じ志を持つ友人と切磋琢磨することで、モチベーションの維持・向上につながる

つまり、外発的な動機を高めるよりも、内発的な動機をいかに高めることができるかがカギとなる。これは森田（2022）の「自走型組織」という考え方をヒントにすることができる。「自走型組織」とは、「上からの指示・命令を待つことなく自分で考えて行動を起こす、自発的な人が多い組織」「経営者や幹部が社員を信頼し、具体的なアクションについて指示・命令などを出す必要のない、出してはいけない組織」のことをいう<sup>6)</sup>。特に今般のコロナウイルスの感染状況次第で緊急事態宣言が発出されると学生は大学自体に登校できなくなるため、一斉授業や対面方式による指導を国家試験対策の軸に置くのはリスクが大きい。学科として学生に対しさまざまな学習に関する仕掛けを講じ、国家試験勉強に対する学生個々の内発的な動機を高め

ることができれば、入構禁止のような事態になっても自発的に取り組みを進められる可能性が高まる。その際、学生が勉強に取り組んでいる中で何かしらの不安が生じたとしても、ある程度自主的に勉強を進める習慣ができていれば、教員によるサポートは遠隔でも十分対応できると考えられる。初めての国家試験受験となる学生に対し、いかに早い段階で学習習慣をつけさせ、自発的な行動が起こせるようにできるか。並行して、学科として学生に対して国家試験勉強自体を負担に感じさせないようにするにはどのような仕掛けを講じることが良いのかが重要である。

### 3 学生の自発性を高めるためのポイント

森田は会社が自走型組織に変わるために必要な要素を、「組織に心理的安全性があること」「実現したいと心の底から思えるビジョン」「循環的に物事をとらえ、本質を見るためのシステム思考」「互いに傾聴しあう質の高い対話」の4つをあげている<sup>7)</sup>。これを国家試験対策の仕掛けづくりに援用すると、「複数で勉強する時にいらぬ気を遣わなくてよい」「合格に向けての明確なミッションがある」「問題が起こりやすい構造をみるシステムシンキング」「心理的安全性のある場での教え合いや意見交換」と置き換えることができる。国家試験勉強そのものに対し教員が主導していくのではなく、教員自体を一つの資源として捉え、学生が主体となって国家試験合格というミッションを目指すための仕組みを多面的に講じることが、学生の自発性を高めることにつながり、年間を通した国家試験勉強に臨んでいけるようになるという仮説を強化できる。この仮説をもとに、次章では2021年度に実際に取り組んだ本学科の具体的な取り組みを紹介していく。

## 4 2021年度国家試験における、具体的取り組み

### 1) 自主学習グループ

2020年度の後期が始まる頃、3年生ゼミ生（当時）との面談時に、「国家試験勉強について何かしらの取り組みを早めにするにはできないだろうか」という相談を受けたことをきっかけとして、当該学生とともに自主的な学習グループ作りのシステムの考案と対象学生への呼び掛けを行うための準備を進めることにした。

2020年12月中旬に、国家試験受験対象となる学生40名に説明会の開催を空きコマに行う旨を一斉メールで呼びかけたところ、20名弱の学生が当日集まった。説明会では自主学習グループLINE（以下、グループLINE）を作成し、不定期な勉強会開催の呼びかけや誤答問題の解説の共有、得意科目・苦手科目の担当を決め、その科目の勉強会の呼びかけを行う（結果的にこの呼びかけは機能せず）などのシステムに関する説明を行い、自由意志によるグループLINEへの参加を投げかけた。なお、このグループLINEには、学科教員（キャリ

ア担当) 1名が参加する形をとった。学生のみでグループを作る方が、忌憚のない自発的な運営が期待されるところと考えられるが、今回の試みは初めて行うものであること、盛り上がっている時はLINEのやり取りが活性化されるものの、いったんやり取りが落ち着いてしまうと、グループ自体が形骸化してしまうリスクが生じる。そのため、グループLINEを活性化させるために、運用当初は、教員側から「〇月〇日に、第32回権利擁護と成年後見制度の過去問を解く勉強会を開催します」などと不定期に発信して参加可能な学生を募り、自主的な勉強会の開催を実施していくことで、グループLINEの運用方法を身につけてもらうことを意識した。

実際、グループLINE開始数か月後には、数名の学生が自発的にグループLINE参加学生に図3のようなアナウンスを行い、学生がそれに呼応する形ができ上がり、学生が主体的に活用するようになった。

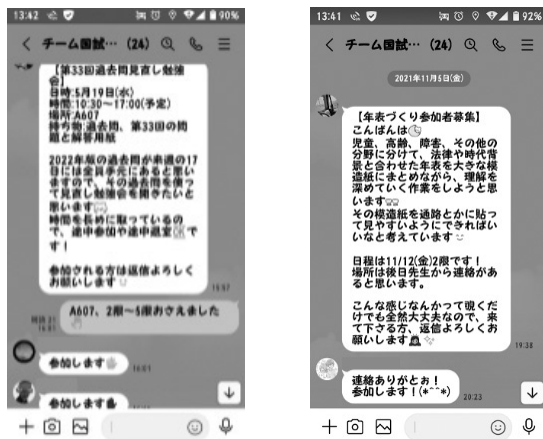


図3 実際のグループLINE

もちろん、単に学生同士で呼びかけあい、集まった学生で漫然と勉強していたわけではなく、根底には個々に「合格したい」という強い思いがあってこそこの呼びかけであったことは想像に難くない。石田<sup>8)</sup>が言うように、学生は望ましい結果を得ようとして行動を起こし、このような勉強会の開催によりモチベーションが高まったことで、上記行動(この場合は、さらなるグループメンバーへの勉強会の呼びかけ)が繰り返されたのではないかと考えられる。

本番が近づいてきた年末には、空き教室で集まって勉強しようと呼びかけを行う学生が出るなど、グループLINEの運用面においても教員の手を離れていった。なお、参加に関するルールは当初から一貫させており、「参加したい」という学生のみLINE上でコメントする形をとり、「不参加」のコメントはしなくてもよいこととした。あくまで自由意思による参加であるということ意識させ、参加できないという心理的不安を学生にかけないよう配慮した。何度も「不参加」というコメントをすることで、本グループLINE自体に所属する

ことのモチベーションが低下することを懸念したためである。

## 2) 社会福祉特論

社会福祉特論(以下、特論)は、社会福祉学科の独自科目として設定し、通年で実施している(前期:月曜日5限、後期:金曜日1限)。前期は、学科の専任教員(一部例外あり)が1コマずつ受け持ち、自身の専門担当科目について講義を行う。講義のポイントは2月の本試験に向けてのポイントを中心に、最低限身につけておくべき知識の伝達と本試験で問われそうな法改正などに触れる。

授業の構成は、まず60分ほどで講義を終えた後に、30問の一问一答小テストを実施し、授業の定着度の自己確認をさせる。誤答があった場合は、間違った問題の解説をプリントに書き写させた上で、間違った問題のみ再度解答させる。30問の小テストの間違い直しを授業時間内に行わせるのは、誤答問題のやり直しをすぐに行うというルーティンの確立と自宅持ち帰りによるやり直しの不徹底を排除するためである。1回目で30問全問正解した場合は、そのまま退室してもよいというルールにした(もちろん、時間内であれば教室に残って自習してもよい)。全問正解しなかった場合は、全問正解するまでテストを行う。ただし、2回目以降は誤答問題のみ解答するため、そこまで時間を要しないように配慮している。小テストは○×による一问一答なので、やり直しの難易度は高くはない。

教員に対する質問は、全問正解もしくは2回目のやり直しで全問正解した後に受け付ける形をとった。科目を担当する教員に対して質問する学生は数名見られたものの、学生全体に教員に対する質問が活性化するまでには至らなかった。この点については、次年度以降の課題としたい。

## 3) 目標シート(現:フィードバックシート)

あることを成し遂げるには、あらかじめ具体的な目標を立て、それに向けて取り組む方が実際の取り組みに具体性が出る。しかし、長期的な目標を立てただけでは漠然としているため、どう取り組んでよいかが分かりづらく、そこに至るためのプロセスをどのように考え、実践していくのがはつきりしない。そこで、国試対策においては、受験当日に獲得したい目標点数(長期目標)を個々の学生に掲げさせた上で、毎月実施する学内模試に向けての目標(短期目標)を別に立て、次の学内模試が行われる1か月間の学習の取り組みをどのように進めていくのかを記述させることに重きを置いた。

学生はこのシートに模試の科目ごとの点数を書いた上で、以下に記す3つの項目(①結果を受けての振り返り、②次回模試の目標得点、③どうやって目標得点



に近づけるか(具体的な取り組み))について記述し、担当教員に提出するというシステムを構築した(図4)。

学号番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

社会福祉士国家試験本番の目標得点 110 点

11/1 (1st) の模試結果

科目	得点	目標	偏差値	順位	科目	得点	目標	偏差値	順位
国語	21	21	10	10	国語	21	21	10	10
英語	10	10	10	10	英語	10	10	10	10
社会	10	10	10	10	社会	10	10	10	10
福祉	10	10	10	10	福祉	10	10	10	10
総合	10	10	10	10	総合	10	10	10	10
合計	61	61	61	61	合計	61	61	61	61

①結果を受けての振り返り  
・何らかの理由で目標に届かなかった科目は、何が原因かを分析し、具体的な対策を講じる。  
・結果に満足している科目は、引き続き努力を続ける。  
・結果に満足している科目は、引き続き努力を続ける。  
・結果に満足している科目は、引き続き努力を続ける。

②次期模試の目標得点 110 点

③どうやって目標得点に近づけるか(具体的な取り組み)  
・具体的な取り組みを記述する。  
・具体的な取り組みを記述する。  
・具体的な取り組みを記述する。

コメント 11/1 (1st) の模試結果を参考に、12/1 (2nd) の模試に向けて、国語と英語の勉強を強化する。

12/1 (2nd) の模試結果

科目	得点	目標	偏差値	順位	科目	得点	目標	偏差値	順位
国語	21	21	10	10	国語	21	21	10	10
英語	10	10	10	10	英語	10	10	10	10
社会	10	10	10	10	社会	10	10	10	10
福祉	10	10	10	10	福祉	10	10	10	10
総合	10	10	10	10	総合	10	10	10	10
合計	61	61	61	61	合計	61	61	61	61

①結果を受けての振り返り  
・何らかの理由で目標に届かなかった科目は、何が原因かを分析し、具体的な対策を講じる。  
・結果に満足している科目は、引き続き努力を続ける。  
・結果に満足している科目は、引き続き努力を続ける。  
・結果に満足している科目は、引き続き努力を続ける。

②次期模試の目標得点 110 点

③どうやって目標得点に近づけるか(具体的な取り組み)  
・具体的な取り組みを記述する。  
・具体的な取り組みを記述する。  
・具体的な取り組みを記述する。

コメント 12/1 (2nd) の模試結果を参考に、12/1 (2nd) の模試に向けて、国語と英語の勉強を強化する。

図4 目標シート(12月分)

4月模試後の③どうやって目標得点に近づけるか(具体的な取り組み)では、「0点になっている科目をさらに勉強する」「何かちがうということはわかって、何が正解か明確にできないものが結構あった」「苦手部分を見直す」等の漠然とした記述が多かったが、回を重ねるごとに「正解の根拠をすべて正解、確実に点数にする」「改めて曖昧だった問題、分からなかった選択肢をしっかりと学習する(12月)」「インプット、アウトプットをしたままではなく、両方を組み合わせて勉強する(11月)」など、より具体的な取り組みに触れた記述が増えた。なお、学生から提出された目標シートには担当教員が毎回コメントを付した後に返却し学生の手元にある状態にすることで、各々の学生が時折それを見ることで、自身の取り組みに関するフィードバックが図れるようにした。

上手な目標設定がやる気を高めるという現象を説明する際に用いられる自己効力感であるが、スタンフォード大学名誉教授で心理学者であるBanduraによると具体的で身近な目標を立てた方が、遠大な目標を立てるより、自己効力感が高まるため、目標達成率が高まるといわれている<sup>9)</sup>。国試本番での目標点数(=遠大な目標)を掲げつつ、毎月の学内模試の結果をもとに、次月の具体的な取り組み(=身近な目標)を記述するという流れが、学生にとって次月までの勉強に対する具体的な取り組みがイメージしやすくなるという実のあるフィードバックになったと考えられる。実際、国試終了後に取ったアンケートの記述に、「自己評価シートで自分のやってきたことを振り返ることができ、足りない部分の確認と自信につながった」と感想を書く

など、目標シートの導入は学生にとって年間を通した国家試験勉強における学びのモチベーションの維持につながった。

#### 4) 紙媒体での過去問の準備

例年、指定テキストとして『過去問解説集』を学生に購入させているが、相応の重さや厚みがあることとかなりかさばるという声が学生から挙がっていた。それを受け、『過去問解説集』を持参していない日でも国試の問題に触れることができるよう、キャリア担当教員の研究室と実習指導室に科目ごとに印刷した過去問を準備し、いつでも取り組めるようにした。特に受験が迫った1月は、総復習を行うために問題用紙を取りに来る学生が多かった。

研究室に問題用紙を取りに来るついでに、学生から国試勉強の取り組み方や現状の伸び悩みなどの相談を持ち掛けられることがあった。単に用紙を受け取るだけでなく、学生と教員の関わりが自然発生的に生まれるという効果がもたらされたのは、学生指導の面で大きなプラスとなった。

#### 5) 空き教室確保による自習体制の構築

後期の「社会福祉特論」は金曜1限開講であり、金曜日以外にゼミのある学生は特論が終わるとその後の授業はない。わざわざ朝早く登校したにもかかわらず1限終了後すぐに帰宅するのは、時間の有効活用につながっていないと感じていた。そこで、学舎の教室使用状況を調べ、特論終了後の2限以降に使用できる教室を確保し、自由参加による学習の場を提供することを試みた。金曜開講ゼミの学生も一定数いたこともあり、当初は数名だった参加者も受験本番直前の1月には20名弱の学生が集まって自習するに至った。

教室内では全員が一つのまとまりとなって勉強をするというよりは、友人同士や同じ分野を勉強する者同



図5 自主勉強の様子

士が小グループを形成して学習していた。講義教室以外にも、1階のチャットラウンジや4階のカフェラウンジ、6階の実習指導室や合同研究室、2階の教員研究室前のフリースペースなども活用しながら各々が学習を進めていた。教員から指示されて集まって勉強するのではなく、自分の意思で勉強すると決断し、それを行動に移した結果であったと考えられる。

#### 6) 下級生との交流（合同勉強会）

2020年度入学学生（当時2年生）は、現カリキュラムの最終学年のため、万が一合格できなければ次年度は新カリキュラム科目で受験しなければならない。入学当初はオンラインによる授業形態が大半を占め、個別での学習であることや分からないことをすぐに教員に質問することが難しく、深い学びを得られていないようだった。また、対面授業のコマ数の制限により、学内での学生同士の交流も持ちにくく、交友関係も広げることができなかった。このような状況の2年生に対し、上級生が本学においてどのような学びを得たり、大学での学生生活を送ったりしてきたのかを聞く機会は、大きなメリットをもたらすと考え、キャリア担当教員発信で合同勉強会の場を提案、実施した。当日は4年生が5名、2年生が9名（うち介護コース3名）参加し、2年生には実際の過去問を解いてもらい、間違った問題の解説を4年生にしてもらおうという形で実施した。その後は、自由な雰囲気、実際の国試勉強

の取り組み方を質問したり、気になっている授業科目に対する質問を4年生に行ったりするなど、緊張感は漂いつつもこれまで知ることができなかったことを直接上級生に聞くことができたことで、参加した2年生にとっても有益だったようだ。上級生である4年生も、下級生に説明するためには生半可な理解ではいけないと、しっかりと解説を読み込んだ上で解説するなど、下級生に対し丁寧に関わってくれたことで、下級生も国試勉強とはいかなるものであるのか実感できた機会となった。

#### 7) 学生発信のアウトプット作業

知識を獲得する上でインプットとアウトプットが必要だといわれる。精神科医である樺沢紫苑<sup>10)</sup>は、インプットとは、「脳の中に情報を入れる（つまり入力する）」ことで、アウトプットとは、脳の中に入ってきた情報を脳の中で処理し、外界に出力することである」と述べている。また、樺沢はアウトプットのメリットとして、①記憶に残る、②行動が変わる、③現実が変わる、④自己成長する、⑤楽しい、⑥圧倒的な差が出る、という6つを挙げている<sup>11)</sup>。

後期に入り、学生から「制度や法律制定の年号が頭に入りにくいけどどのように勉強すればよいか」という相談が複数寄せられた。一定インプットによる学習が進んでいる学生だったこともあり、アウトプットによる学習方法を説明し、分野を横断した形での年表を作成してみてもどうか、と提案した。その後、同じ悩みを抱えていた学生同士が話し合い、年表を作成する呼びかけがグループLINE上にて行われた。結果、5名の学生が参加し、空き教室に集まって年表を作成した。完成した年表は、学舎内にあるスペースに掲示し、当該学年だけでなく、他学年も見ることができるようにした。作成した年表には、その後も過去問の解説や他の解説書などで必要だと思った情報などをふせんに書いて貼っていくことで、随時アップデートされていった。この取り組みがさらなる発想を生みだし、苦手意識を感じていた社会保障制度の仕組みを視覚的に理解できるような表を、学生が主体的に作成する取り組みへとつながった。

この取り組みは、友人と話し合いながら模造紙に書くという作業により、学生個々の「行動が変わって」いった様子がうかがえた。アウトプットによる取り組みにより年表で記した内容が「記憶に残り」、その後の国家試験勉強にも有効に働いたと考えられる。また、実際に年表や図表を作成中の様子を見る機会があったが、どの学生も「楽しんで」作成していた。テキストや解説を読み込んで知識の蓄積を図るインプットだけでなく、アウトプットを行うことで自分の学び方に変容が生まれたことを参加学生は体感できたようだった。



図6 合同勉強会の一コマ



8) 各ゼミでの取り組み、学科教員の学生への関わり  
ゼミによって国家試験の受験者の割合が異なるため、ゼミの授業全体を使っている取り組みは難しいものの、ゼミの時間に模擬問題集や一問一答で問題に触れる時間を設定されたというゼミがあった。また、各教員の専門性を活かし、分からない問題や解説に対する説明を求める学生に随時教員が対応することで、学生の学びの深化を図ることができた。このような継続的な取り組みにより受験に必要な知識のベースアップにつながったとの声が学生から聞かれた。

#### 9) キャリアセンター課の関わり

学内模試の印刷や後期「社会福祉特論」のサポート、欠席時の録画資料の提供、受験申し込みのサポートや個別面談等の直接的な関わりかつ側方支援を担うことで、学生に対する支援を多面的に行う体制が構築できた。教職員が連携して学生に関わることは、それぞれの立場だけでは目が届きにくいことにも気づきやすくなるという副次的効果をもたらし、密な連携を図ることで、よりきめ細やかな学生指導を行うことができた。

### 1. 2021年度国家試験合格者数・率

2021年度の社会福祉士・精神保健福祉士の受験結果は表5の通りである。

表5 第34回社会福祉士・精神保健福祉士の結果

	受験者数 (人)	合格者数 (人)	合格率 (%)	全国合格率 (%)	新卒合格率 (%)
社会福祉士	37	24	64.9	31.1	52.4
精神保健福祉士	12	10	83.3	65.6	73.3

今年度の結果を見る限り、多くの学生にとって、個々の学習の積み重ねが合格という結果に結びついていると評価できる。新卒合格率(社会福祉士…52.4%、精神保健福祉士…73.3%)を超える合格率を上げることができたということは、本研究による学習の仕掛けが学生に一定の効果を与えたといえよう。

年度当初に「合格するには、総得点の65～70%を目指そう」と学生に伝え、それをもとに本番に獲得したい得点を長期目標として目標シートに記載させていた。しかし、第34回社会福祉士国家試験の合格点が105点と総得点の70%という結果となったため、額面通り65～70%と受け止め、その範囲に照準を合わせてしまっていた学生は残念な結果となった。社会福祉士国家試験の合格率はここ数年、受験生全体のおよそ3割で推移しているため、年度によって受験生の点数が高かった場合は合格ラインが上昇してしまう。この点については、正直想定しづらい面があるが、学生自身が定める

本番での点数をどの水準に定めさせることが妥当であるのか、今後、検討を重ねていきたい。

### 考 察

国家試験の結果が出た3月中旬ごろに、国家試験受験学生全員に対して「国家試験受験に向けての取り組みに関するアンケート」を実施した(回答は自由意志で強制しない旨を明示した)。実施方法はGoogle classroomのGoogle フォームを用いた(37人中14名が回答。37.8%の回答率)。本アンケートの回答項目は以下の6つである。

- (1) 国家試験受験に向けての取り組みについての自己評価を教えてください(4件法)
- (2) 国家試験受験に関して、どのような勉強方法を行いましたか(選択肢から該当するものを選ぶ)
- (3) 自分が知識を深めていくにあたって効果のあったテキストを教えてください(選択肢から該当するものを選ぶ)
- (4) 授業以外で国試の勉強をする際、利用した場所やスペースはありましたか(選択肢から該当するものを選ぶ)
- (5) 自分の中で「この点は本当によくやったと思う」ということがあれば教えてください(自由記述)
- (6) 今年度の国家試験受験勉強を振り返っておもうこと、感じたこと(自分自身に関してのこと、友人との関わり、教員に対して…)など、思いつくことを自由に書いてください(自由記述)

(1) 国家試験受験に向けての取り組みの自己評価は、「よくやった」「どちらかといえばよくやった」と思うと回答した学生の割合は7割を占めており、年間を通して納得した勉強に取り組めた学生が大半を占めた。(2) 学生が行った国家試験勉強に関する勉強方法は、「過去問解説集を使う」「国試に関するYouTube動画を視聴」が大半を占めていたが、それらに加えて「国試問題の(無料)アプリ」を使った勉強方法は92.9%と、ほぼ回答した学生がアプリを使って勉強していた。アプリを活用することでスキマ時間や通学の移動中にも勉強できる時間を確保していたことが推察される。(3) については、『過去問解説集』や科目ごとの詳細な説明が記載されている『ワークブック』の活用が効果的であったとの回答が多かった。また、(4) 国家試験勉強を行うための場所やスペースとしては、「教員研究室前のフリースペース」「空き教室」「合同研究室」「自習室」を活用していた学生が多かった。授業以外では大学に登校せずに試験勉強する者も一定数いたが、大学を一番の勉強場所としていた学生が多く、個人もしくは小グループで勉強できるスペースを見つけ、そこで勉強するようにしていたようだった。

(5) 国家試験勉強を行うにあたってよかったと思うことについて自由記述を求めたところ、「ただ暗記するのではなく、興味を持って取り組んだこと」「実践問題



集を友達と解いて、なぜその回答を選んだのか話し合ってから答えを見て調べていく流れがよかった」「勉強の仕方について先生に相談していた。友達と励まし合ったり悩みを共有することで長期間勉強に打ち込むことができた」「東アカでしたことをワークブックで振り返る→復習する癖がつく、どこに何が書いてるかが自然と分かるようになる、より理解が深まる、書き込みをたくさんすることで本番で自信に繋がる」など、学生一人ひとりが自分なりの取り組み方法を見出し、実践していくことができたことが読み取れる。

(6) 国家試験勉強を振り返って感じたことについても自由記述を求めた。「精神保健福祉士も社会福祉士も2つとも受かりたいという思いも強かったですが、正直、友人や先生方のおかげで頑張れたと思っています。みんなのモチベーションも高く勉強するにはありがたかった環境でした」「人生で初めてこれだけ勉強しました。(中略)椅子に座りすぎてお尻へこみそうぐらいました。最近覚えた事やいい問題に出会った時にそれを周りの友達や教員にアウトプットした事がよかったと思っています」「友達とやった方が入りやすい。問題について討論したりするのも入りやすい」「先生から勉強しろ！と言われるのではなく、合格率は頑張り次第で50%だと、私たちならやれると信じてくれたこと」「早いうちから模試を受けることができたことで、早期に自分の実力を認識できてよかった」「自主学習グループに入ることで一緒に国家試験に挑む仲間ができて、モチベーションに繋がった」など、今回の取り組みが学生にとってさまざまな支えとなり、長期間の国家試験勉強を継続し、多くの学生が望む結果を得ることができたと考えられる。

ただ、学科全体としてみた場合、取り組み自体についての課題もある。自主性が芽生え長期間の国家試験勉強に臨む心構えができた学生が大半を占めたものの、なかなかその域まで達しない学生がいたのも事実である。自発性を求めるがゆえに、全体的な勉強の場を強制することが難しいため、合格ラインに達することが難しかった学生にとってどのような仕掛けや指導が必要かつ効果的だったのかについては、今年度の取り組みをしっかりと分析・検証し、具体的な方策を考えていく必要がある。その点が解消できる打開策を発見し、対策を講じることで、より多くの学生が国家資格取得という望む結果を得ることにつながるであろう。

## 結 論

行動分析学に基づく教育手法の導入により、社会福祉士国家試験の合格者数・率が大きく上昇した。

## 引用文献

- 1) 鶴蒔靖夫. 大学からの地方再生(第1版). IN 通信社. 2015, 116
- 2) 杉山尚子. 行動分析学入門—ヒトの行動の思いがけない理由(第1版). 集英社新書. 2005, 17
- 3) 石田淳. 「やる気を出せ！」は言うてはいけない(第1版). フォレスト出版. 2008, 73
- 4) 同掲1) 84
- 5) ウィリアム・T・オドノヒュー、カイル・E・ファーガソン著 佐久間徹監訳. スキナーの心理学 応用行動分析学(ABA)の誕生(第1版). 二瓶社. 2005, 156
- 6) 同掲5) 93
- 7) 森田満昭. 社員が自ら考え、動く自走型組織の作り方(第1版). 幻冬舎. 2022, 24
- 8) 同掲7) 29
- 9) 出口治明. 「教える」ということ 日本を救う、[尖った人]を増やすには(第1版). 角川書店. 2020, 96
- 10) 佐々木正悟. すぐやる人になる心理学フレームワーク(第1版). 実業之日本社. 2015, 59
- 11) 樺沢紫苑. 学びを結果に変える アウトプット大全(第1版). サンクチュアリ出版. 2018, 18
- 12) 同掲11) 36-37

# Impact of Behavior Analysis on Enhanced Acceptance Rate of National Board Examination for Certified Social Workers — Evidence from Examination in 2021 —

Akihiro HAGIHARA, CSW, MA,<sup>\*†</sup> Madoka OHNO, MA,<sup>\*</sup> Takahiro TSURUNO, CSW, PhD,<sup>\*</sup>  
Chiemi NAKAGAWA, CSW, MA,<sup>\*</sup> Kuniko ISHIKAWA, CSW, PhD,<sup>\*</sup>  
Kosuke TOMIZAWA, CSW, MHSW, MA,<sup>\*</sup> Tetsuji YAMANAKA, CSW, MA,<sup>\*</sup>  
Daisuke SUGAHARA, MA,<sup>\*\*</sup>

**Objectives :** The national pass rate for the national exam for social workers has been around 30% since the 8th time, and the national pass rate for the national exam for mental health workers has been around 60% since the 3rd time, with passing grades fluctuating from year to year. Due to the recent spread of coronavirus infection, there was a time when school attendance was restricted. As a result, it has become difficult to acquire the ability to pass the national exams through direct instruction as in the past.

**Methods :** Therefore, in FY2021, the Department of Social Welfare reviewed its guidance policy regarding preparation for the national examination, and based on the goal of "self-initiated and independent learning," rather than teacher-led efforts, the entire department provided support to students throughout the year by organizing independent study groups, utilizing goal sheets, and taking various other measures based on a behavior analysis approach.

**Results :** As a result, the department's measures to prepare for the national examinations have motivated many students to study, which has led to increased spontaneity in studying, deepened learning through cooperative learning among students, and led to the discovery of their own ways to approach their studies.

**Conclusions :** In FY2021, the pass rates for the 34th National Examination for Social Workers and the 24th National Examination for Mental Health Workers showed significant growth, with pass rates of 64.9% and 83.3% for social workers and mental health workers, respectively, exceeding the national pass rates for new graduates.

**Key Words :** National exam preparation, Behavior analysis, Spontaneity, mechanism

(Received in Oct 13, 2022, Accepted in Dec 10, 2022)

---

<sup>\*</sup> Department of Social Services, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences.

<sup>\*\*</sup> Career Center, Osaka University of Human Sciences.

<sup>\*†</sup> Corresponding author : Department of Social Services, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences. 1-4-1, Shojaku, Settsu, Osaka 566-8501, Japan.  
E-mail : a-hagihara@kun.ohs.ac.jp